甲佐町総合防災訓練

熊本地震を忘れないためにできる事

11月21日（日）町内各地で総合防災訓練が行われました。
同訓練は、熊本地震を教訓として、大雨や台風、地震などの自然災害に迅速に対応できるよう日ごろから備えるため、町が主催。甲佐町消防団や各自主防災組織など約900人が参加し、町内各地でさまざまな訓練に取り組みました。

1＿高台への要支援者の搬送訓練を行う西寒野区の皆さん　2＿緑町区では防災マップを活用して避難経路を確認　3＿整備した防災用かまどで炊き出し訓練に取り組む世持区の皆さん　4＿糸田区では11月20日（土）に防災教室を開催　5＿町職員に熊本豪雨での災害対策本部運営などを説明する球磨村防災管理官の中渡さん　6＿12月９日（木）に熊本大学准教授の竹内さんから地域防災について学ぶ民生委員やケアマネージャー

■2年ぶりに全町で取り組む総合防災訓練

11月21日（日）町内各地で、甲佐町総合防災訓練が開催されました。

2年ぶりの開催となった総合訓練は感染症対策を行いながら実施。午前8時に大雨による特別警報が発表されたという想定で訓練放送が流れると各地で訓練が行われました。

緑川の氾濫で浸水被害が予想される西寒野区では、高台への歩行困難者搬送訓練を実施。切り出した真竹とブルーシートで作った簡易担架や車いす、リヤカーを使いながら、搬送方法を確認しました。

緑町区では、高齢者を対象に防災マップを活用して避難経路を確認。自主防災組織の活動支援事業を活用して防災用かまどを整備した世持区では、炊き出し訓練を実施しました。糸田区では、町くらし安全推進室の佐々木室長を招いた防災教室を開催し、防災への意識を高めました。

■町職員や民生委員・児童委員が専門家に学ぶ

町生涯学習センターでは球磨村の防災管理官を務める中渡さんが講演。町職員が熊本豪雨の体験などに耳を傾けました。12月9日（木）には民生委員・児童委員などが熊本大学の竹内さんから地域防災への取り組みを学びました。

「公助」の限界と「自助」「共助」の重要性

くらし安全推進室
佐々木 善平 室長

昨今の大規模災害では、住民を支援すべき行政自体が被災し、公的な支援（公助）が滞ってしまう場合があります。そのようなとき、特に重要なのは地域コミュニティの防災力（自助・共助）です。町では、防災士の育成や自主防災組織の活動の支援を行っています。

いざというとき、住民同士の支え合いは大きな力になります。防災訓練などを通して地域の防災力を高めましょう。

●お問い合わせ先
町くらし安全推進室　☎096 - 234 - 1167

球磨村防災管理官
中渡 徹 さん

あの日、危機が迫る住民に防災無線で涙ながらに避難を訴える。村の危機管理業務統括のため平成29年４月より現職。元自衛官。

■自然の猛威に無力さを知る

令和２年７月の豪雨は、村民25名の尊い命を奪いました。

７月４日の朝、降り続く雨と迫りくる濁流の中で、救助を求める住民の声が今も耳から離れません。あの日、私達は自然の猛威に対していかに無力なのかを思い知らされました。

４日午前３時30分に避難指示を発令し、防災無線で命を守る行動を呼び掛けました。その後１時間で状況は深刻化。緊急サイレンを使用して住民に身の危険が迫っていることを伝えました。とにかく逃げてくれという一心でした。

■自分の命を行政に依存しない

この災害では、住民相互に声を掛け合い、助け合いながら避難した例が山ほどありました。避難するのに移動手段がないという声も聞きますが、自分の命を守るためには、自らの手段で早めに安全な場所へ避難するしか方法はありません。

田舎に行くほど行政に対する依存度が大きくなる傾向にあります。しかし、自分の命まで行政に依存してはいけません。向こう三軒両隣の精神こそが自主防災の原点です。

広報紙で見る球磨村の今

広報くまむら2021年 ７月号

特集　あの日から一年

令和３年７月４日午前８時30分。人吉球磨地域に甚大な被害をもたらした豪雨災害から一年となるこの日、サイレンの音と共に黙とうが捧げられました。忘れもしないあの日から始まった復興への歩みを振り返りながら、変わり行く球磨村の今を伝えています。

「広報くまむら」はこちらからご覧ください▲

令和２年７月豪雨の被災地と絆をつなぐ

■甲佐中生徒が災害ボランティアで被災地支援

11月13日（土）球磨村と芦北町で甲佐中生徒の有志84人が災害ボランティア活動に取り組みました。

この活動は、甲佐ライオンズクラブの支援を受けた同校（永瀬善久校長）が実施するもので、今回で４回目。昨年11月に被災後初めて球磨村を訪れた生徒たちは、被災家屋の土砂撤去などを手伝い、以来定期的に同地区の住民と交流を深めています。

今年度最初の訪問となったこの日、１年生から３年生までの84人は２つの被災地に別れてボランティア活動に従事。豪雨災害後、生徒会で集めた募金を贈った佐敷中学校を訪れたグループは、同校（吉本裕康校長）の生徒たちと合同で芦北仮設住宅の入居者との交流を楽しみました。

球磨村の神瀬地区を訪問したグループは、道路に残る土砂の撤去や花壇の整備、古民家の清掃に汗を流しました。

仮設住宅でボランティアに参加した豊永はるさん（横田区）は「熊本地震の時、小学生だった私たちはたくさんの温かい支援をいただきました。今度は私たちが被災者の皆さんに寄り添っていきたいです」と笑顔を見せました。

▲佐敷中生徒からを募金へのお礼の言葉を受ける甲佐中生徒

▲芦北町の仮設住宅で入居する子どもたちと交流する甲佐中生徒たち

▲球磨村神瀬地区で道路に堆積したままの土砂を撤去する甲佐中の生徒たち